

## 絵の具での遊びにおける幼児と学生の感性に関する一考察

### —感性豊かな保育者を育成するために—

A Study on the Sensibility of Infants and College Students in Playing with Paints :  
Educating Students as Nursery School Teachers with Rich Sensibility

小林 曜子  
Kobayashi Yoko

本研究は、筆者が幼児の感性を豊かに育てたいと様々な実践の中から、絵の具での遊びにおいて幼児と学生とのその遊び方の違いに気付き、感性について焦点をあてて比較検討した。その結果をふまえ、幼児の感性を豊かに育てるために、保育者を志望する学生が授業の中でどのように体験し学びを深めていけばよいかを考察し、「図画工作」や「保育内容(造形表現)」の授業の改善をめざすものである。

キーワード：感性、絵の具での遊び、幼児と大学生の感性、保育者の育成

## 1. 研究の背景と目的

### (1) 「図画工作」に対する学生の意識

文部科学省、国立教育政策研究所、教育課程研究センターの特定の課題に関する調査—小学校図画工作・中学校美術—<sup>1)</sup>の調査結果(2009)によると、小学生約3,500人の83.3%が「図画工作の学習が好き」と答えている。8割以上の子どもたちが大好きなこの科目であるが、本学の学生では「図工は嫌いです。」「絵が上手に描けないから苦手です。」という声が何人も聞かれた。「図画工作」という科目は、小学校教諭一種免許状並びに幼稚園教諭一種免許状、保育士資格を取得するための大切な科目である。また、「保育内容(造形表現)」は幼稚園教諭一種免許状、保育士資格を取得するための科目である。本研究では、主に保育者を養成するという視点から「図画工作」と「保育内容(造形表現)」の授業のあり方を考察したい。

平成27年度前期「図画工作」の1年次での授業のオリエンテーションでアンケートを実施したところ、「図画工作が好き」と答えたのは67.3%の学生で、苦手意識を持っている学生は32.7%

という結果であった。高校での選択科目で美術を選択していた学生はわずかに 17%であった(2015.4.9 調査、1年生 95名対象)。

実際の授業中においても、「クレヨンや絵の具を使って絵を描いたのは何年ぶりです。」「粘土をしていたら子どもだった頃がなつかしく思い出された。」などの声や感想が聞かれた。

平成 26 年度の美術科教育学会における山形大学地域教育文化学部の降旗孝氏の研究発表では、60%の学生が図画工作に対して苦手意識をもっていると発表しており、『『うまく上手にしなければならぬ。』という価値観に強く縛られている。』ことが苦手意識を生む要因となっていると述べている。子どもの頃、夢中になって絵を描いたり物を作ったりしたことはあったが、進級するに従って造形的な表現活動をする機会はしだいに少なくなっていると思われる。また国語・数学・英語などの教科学習に忙しかったり、スポーツや音楽など他に熱中するものがあったり、余暇に図工(物づくりや美術館鑑賞など)をする機会や時間がないのが現状と思われる。さらには、衣服が汚れることが多くあり、様々な素材や材料・用具や道具を使いその準備や片付けが面倒な科目である。そういったことが要因となって苦手意識をもつようになってきていると思われる。

神長(2015)<sup>2)</sup>は「保育教諭養成課程研究」の中で、現在の保育者養成が抱える課題について「学生たちの世代はすでに『遊び体験が乏しい時代』であり、もう既に少子化といわれる時代、平成元年の教育要領改定後に生まれた世代ですから、人間関係の希薄化とか、自然体験の減少、家庭の教育力低下という中で育ってきた世代です。(中略)「遊びの喪失」といわれていた時代に育ってきた子が、今の学生です。いかにして幼児期の教育の本質を理解し、保育者としての基礎を身につけるか。遊びの体験がない学生が、遊びを通しての指導を中心とする乳幼児の教育を担う人材にどうなっていくのか、遊びの楽しさを提供できる人になれるかということは課題です。」と述べている。図画工作に、目の前の学生の姿であると思われる。

しかし、図画工作での楽しさ、面白さを体験することは、子どもと一緒に感じたり気付いたりしたりするなどの感性を豊かにすると考える。そして子どもたちの心を豊かに育み、さらには生きる力を育てることにつながると思われる。図画工作が好きな保育者をどのように育てていくかが大きな課題である。

## (2) 造形活動に見られる子どもの素晴らしさ

「美術による人間形成」Lowenfeld、V (1995)<sup>3)</sup>には、子どもの自己表現の発達段階が年齢ごとに述べられている。先行研究をふまえながら、子どもの様子を観察すると子どもの絵は、「トントン」、「くちゃくちゃ」、「ぐるぐる」と言いながら何が描かれているか分からない表現をする時期から、次第に「かわいい。」「ふーん。なるほど〇〇なのね。」と描かれたものが分かるようになっていく。何気なく描かれた線や形の中に、その年齢ならではの、その子ならではの表現の仕方があり、おもわず微笑んでしまう“面白さ”に気付くことがある。子どもの描画における発達のプロセスを知り、子どもの面白くて楽しい表現と出会い、一人一人を知ることは専門職である教師や保育者の仕事の醍醐味と感ずることが出来ると思われる。

また、「子どもというものは素晴らしい能力を秘めていることを、私たちは知っているのです。子どもたちは誰しも、物事を探求し、知識や知能を積み上げ、両手や思考など持ち得るすべてを使って自己を表現する能力をもっています。彼らは『100の言語』をもち、それらはアトリ

エ(芸術作品を作る工房ではなく、純粹な美と感覚の作業空間)で作品となって結実するのです。」

(p.14) これは、1991年の「ニューズウィーク」誌に世界最高の教育水準の教育実践と取り上げられたイタリアのレッジョ・エミリア市の幼児教育を紹介した「驚くべき学びの世界」<sup>4)</sup>の一節である。子どもの素晴らしさを発見しながら、仕事ができるこんな素敵な仕事はないと考える。保育者志望の学生に造形活動に興味・関心をもたせ、子どもの力を引き出す指導を是非、現場で実践してほしいと考える。

### (3) 小学校学習指導要領解説 図画工作編<sup>5)</sup>での感性に関する位置づけ

小学校教育要領における「感性を働かせながら、作り出す喜びを味わうようにする」学習の重視について

小学校学習指導要領 図画工作編では、教科の目標として「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、作り出す喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」(P.6)とあり、「感性を働かせながら」については、平成20年度の学習指導要領改定にあたって新たに加えられた文言である。児童の感覚や感じ方などをいっそう重視することが示されている。

### (4) 幼稚園教育要領解説<sup>6)</sup>での感性に関する位置づけ

幼稚園教育要領における「感じたり考えたりしたことを、自分なりに表現する」経験の重視について

幼稚園教育要領の感性と表現に関する領域「表現」では、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにするために、3つのねらいを設定している。3つのねらいとは、すなわち

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

とある。その解説<sup>5)</sup>では

「幼児は、毎日の生活の中で、身近な周囲の環境とかかわりながら、そこに限りない不思議さや面白さなどを見付け、美しさや優しさなどを感じ、心を動かしている。そのような心の動きを自分の声や体の動き、あるいは素材となるものを仲立ちにして表現する。」(p.158)と述べられている。

また、「豊かな感性や自己を表現する意欲は、幼児期に自然や人々など身近な環境とかかわる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことによって育てられる。したがって、幼稚園においては、日常生活の中で出会う様々な事物や事象、文化から感じ取るものやそのときの気持ちを友達や教師と共有し、表現しあうことを通して豊かな感性を養うようにすることが大切である。」(p.159)とある。

このように、幼稚園教育要領では子どもが五感を通して素材そのものを感じたり、考えたりして自分なりに表現することが重視されている。これは、保育所保育指針にも同様に明記されている。

## (5) 本研究の目的

子どもが感じたことや考えたことを、自分なりに表現できるよう支援をするにはどのようなことをふまえ、保育者を志望する学生に造形表現の技術指導に加え何を伝えるべきかを考察したい。そこで、本研究では、絵の具での遊びにおける3歳児から5歳児の幼児の感性の育ちの特徴を明らかにし、大学生の感性の表れ方と比較検討をする。具体的には、各年齢の幼児が絵の具での遊びにおいてどのような感性を働かせるのか、すなわち、何に気付くのかを明らかにする。そして、保育者を志望する学生が幼児と同じ遊び方をして何を感じ、何に気付くのかを比較することで、どのようなことが大切なのかを考察する。

## 2. 絵の具での遊びにおける感性の育ちと大学生との比較

### (1) 「感性」について

広辞苑第六版(2014)<sup>7)</sup>では、「感性」とは、①外界の刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性。②感覚によって呼び起こされ、それに支配される体験内容。従って、感覚に伴う感情や衝動。欲望も含む。③理性・意思によって制御されるべき感覚的欲求④思惟(悟性的認識)の素材となる感覚的認識。とある。保育現場ではよく教育目標に「感性豊かな子ども」といった文言をよく使うが、保育の中ではある刺激に応じて幼児が心を動かされ、その心の動き方で言葉や表情・動きなどで表現されることではないかと考える。

小学校学習指導要領解説図画工作編<sup>5)</sup>では、「『感性』は、様々な対象や事象を心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性を育む重要なものである。視覚や触覚などの様々な感覚を働かせながら、自らの能動的な行為を通して、形や色、イメージをとらえている。これを手がかりに児童は発想をしたり、技能を活用したりしながら、自他や社会と交流し、主体的に表現したりよさや美しさなどを感じ取ったりしている」とあり、心で感じ取ることや、感覚を働かせて知性と一体化して創造性を育むことの重要性を述べている。

幼稚園教育要領解説<sup>8)</sup>では、前述のように「幼児は、毎日の生活の中で、身近な周囲の環境とかかわりながら、そこに限りない不思議さや面白さなどを見付け、美しさや優しさなどを感じ、心を動かしている。そのような心の動きを自分の声や体の動き、あるいは素材となるものを仲立ちにして表現する」(p.158)とある。このことから、絵の具での造形活動においても、幼児はその素材に対して興味をもち、そこで心を動かし、そうした心の動きを表現していると言える。この解説文に基づき、以下に絵の具という「素材」に出会った場面での幼児の心の動きの事例を述べる。一つの事例として、筆者が実践した活動での幼児の「面白さや不思議さなどを見付ける。」という心の動きである。

「6月の天気の良い日のことである。数人のある4歳児と5歳児が、砂場でごちそう作りをして遊んでいた。気温がだんだんと上がり、しだいに子どもたちから『のどかわいてきたね。なにか飲みたいね。』という声が聞こえ始めた。その声を聞いて担任教諭であった筆者は、子どもたちに水分補給を促すとともに、絵の具を出してきてテラスで絵の具を容器に溶き始めた。お茶を飲み終えた子どもたちが、筆者のもとに集まってきて、その様子をじっと見つ

め、すぐに遊びはじめた。子どもたちは、『あつ、ジュースみたいになった。ジュースだ。オレンジジュースができた。こっちは、抹茶みたいになったよ』などと色水ができることに喜んだり、絵の具と絵の具が混じって変色すると驚いたり、不思議がったりしていた。」このように、幼児は、絵の具という素材に出会って水の感触の心地よさを感じながら、色水の美しさを感じたり、色が混ざる面白さや不思議さを見付けている。<sup>注1)</sup>

幼稚園教育要領解説<sup>8)</sup>の感性と表現に関する領域「表現」では、「幼稚園においては、日常生活の中で出会う様々な事物や事象、文化から感じ取るものやそのときの気持ちを友達や教師と共有し、表現しあうことを通して、豊かな感性を養うようにすることが大切である。」と述べられている。このことから「感性」とは「日常生活の中で出会う様々な事物や事象、文化から感じ取るものやそのときの気持ち」であり、「感じ取るものやそのときの気持ち」が幼児期には素直に表現できることが大切であると思われる。

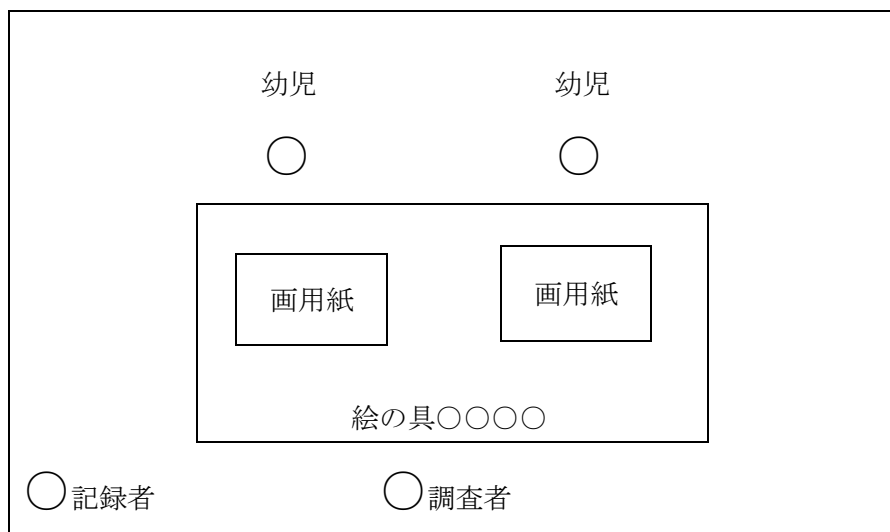
楨(2008)<sup>9)</sup>は、「保育を開く造形表現」の中で、「感性は『価値あるものに気付く感覚』(片岡徳雄(1990)、『子どもの感性を育む』NHK ブックス、p.74)です。感性は一般には刺激に対する感受性という受動的なものと考えられがちですが、保育の中で育てようとしている感性は、単なる感性ではなく、主体者(幼児)が自ら気付く能動的なものとするのが適切でしょう」(p.20)と述べている。子どもたちが様々な生活経験の中で美しさや不思議さに出会い、目を輝かせて感じ取り、楽しさや喜ぶ気持ちを味わわせたいと思う。

## (2) 研究の方法

### ① 幼稚園での協力児および実施期間

T市内公立幼稚園A園とB園の2園であり、3歳児11名、4歳児26名、5歳児21名の計58名であった。実施時期は、2012年5月～6月の5日間である。実施については、保育時間の9:00から11:30、または給食後の自由遊び時間の13:00～14:30であり、空き教室に絵の具遊びのコーナーを作り実施した。

実施のコーナーの見取り図は、図1のとおりである。



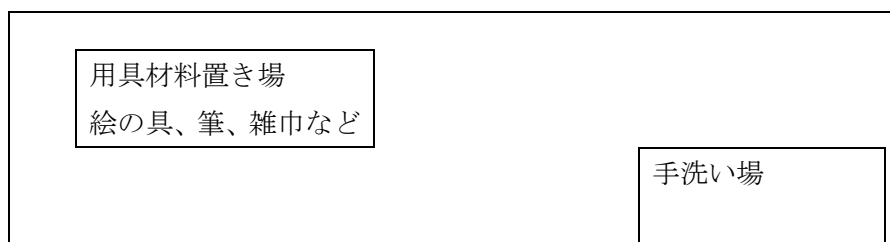


図1 絵の具での遊びの実施コーナー見取り図

### ②調査方法

4色の絵の具を用意した。4色とは、赤、青、黄、紫である。協力児がこの4色の中から使いたい絵の具を選び、調査者はその絵の具を協力児の手のひらに直接渡した。(写真参照)

絵の具は、幼児が直接素手で触るので、安全や健康を保護する安全規格に合致した製品に付与される「CEマーク」のもので、ぺんてる株式会社のクラス用ポスターカラーを使用した。なお、画用紙には、事前に刷毛で水を塗っておき、絵の具を動かしやすいようにした。

この調査は、2人もしくは3人のグループで15分間行った。画用紙に絵の具を落とした後、協力児が遊ぶ様子をビデオ記録した。調査の際には、幼児がリラックスして楽しく活動に取り組めるような雰囲気にするために、最初に簡単な会話をするように心がけた。

ビデオ撮影に際しては園の許可を取り、またデータは研究者のみが見て鍵のかかる場所に保管するなど、研究倫理面での配慮を徹底した。



3歳児の絵の具遊びの様子①  
手のひらに絵の具をのせる



絵の具遊びの様子②  
手のひらでにじみを押さえている

### ③分析方法

ビデオに記録された協力児の遊びの様子をカテゴリーに分類した。

記録されたデータは、エクセルに一人一人の幼児がどんな反応をしたか、どんな言葉を発したかなど、時系列に書き起こした。幼児の反応や言葉をできる限り忠実かつ簡潔に表現できる一文

に置き換える「コード化」と呼ばれる作業を行った。次にそのコードを内容の類似するもの同士を集め、まとめた内容に表題（タイトル）をつけた。

なお、信頼性、妥当性を明確にするために、筆者を含む3人でコード化を行った。分類作業の際、内容がどの表題に属するのか一致しないカテゴリについては、協議を行い決定した。

#### ④研究実践で使用した保育指導案

各協力園に保育指導案を提示し、ミーティングを行った後実践させていただいた。

平成 年 月 日 ( )		組 ( 歳児) 男児 名 女児 名		
子ども の 姿	<p>3歳児：園生活にしたいに慣れ、保育者の誘う遊びに参加できるようになるが、遊びへの興味がないと参加できない幼児もみられる。</p> <p>4歳児：自分の身の回りのことができるようになり、いろいろな遊びに興味をもって取り組むようになる。</p> <p>5歳児：素材と触れ合うことで自分の思いやイメージをもち工夫して表現しようとする。</p>			
ね ら い	絵の具の素材を使って自分なりに表現して楽しむ。	活動 内容	絵の具という素材に触れながら、いろいろな色で遊ぶ楽しさを味わう。	
時間	子どもの活動	環境構成	援助及び配慮点	言葉がけ
9:00 ま た は 1:00	<p>○絵の具で遊ぶ身支度を する。</p> <p>1好きな色を選ぶ。</p> <p>2画用紙の上で、指で線 を描いたり、手のひらで 広げたりする。</p> <p>トントン、シュッシュ ッ、ヌリヌリ、ペタンペ タンなど手を動かしながら遊ぶ。</p> <p>3違う色を追加する。色 が変わることに気付き、 手のひらで混ぜていく。</p> <p>4画用紙いっぱい に遊んだら、作品を乾かす。 ○手を洗う。</p>	<p>自由に好きな遊びで 遊んでいる時間</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・赤、青、黄、紫のポ スターカラー</li> <li>・8つ切り白の画用 紙、絵の具ポット、筆、 ハケ、雑巾、新聞紙</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これからする遊びに興味をもて るよう話しかける。</li> <li>・絵の具を幼児の手にのせて、画 用紙の上でどのように遊ぶかを見 守る。</li> <li>・遊んでいく過程の中でつぶやき や周りの子供たちとの会話、保育 者とのやり取りなどを楽しませ る。「○○みたい」「△△になっ たよ」</li> <li>・手や指の感触を楽しんでいる子、 色の動き（にじみ）に興味をもつ 子、色が変わり混色を楽しむ子な ど十分楽しませるようにする。</li> <li>・幼児が色を広げたり、混ぜたり するときに、感じたことや気付い たことを共感的に受け止める。</li> <li>・画用紙いっぱい に十分遊ぶこと ができたら褒め、片付けを促す。</li> </ul>	<p>①今日はきれいな 色で遊びたいと思 います。</p> <p>②どの色で遊びた いかな？好きな色 をおしえてね。</p> <p>③画用紙の上 にのせるので手や指で 遊んでね。</p> <p>(どの年齢も保育 者から「○○して みたらおもしろい よ」といった提案 をしないで幼児に 任せる)</p>

評反 価省	絵の具の色に興味をもち、楽しく遊べたか。またいろいろな遊び方がみられたか。		<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人ひとりに応じて、絵の具に楽しませることができたか。</li> <li>・素材の準備は適切であったか。</li> </ul>	幼児への言葉かけは適切であったか。
----------	---------------------------------------	--	---	-------------------

⑤学生での「図画工作」の授業場面での調査方法

実施日は2014年5月1日 大学1年生103名を対象に実施した。

幼児の場合と同じく4色の絵の具を用意した。4色とは、赤、青、黄、紫である。学生がこの4色の中から使いたい絵の具を選び、幼児役と保育者役になり、保育者役はその絵の具を幼児役の学生の手のひらに直接渡した。(写真参照)

絵の具は、直接素手で触るので、安全や健康を保護する安全規格に合致した製品に付与される「CEマーク」のもので、ぺんてる株式会社のクラス用ポスターカラーを使用した。この模擬授業では、2人のペアで15分間行った。幼児役の学生が好きな色の絵の具を保育者役の学生にもらって絵の具で遊び、保育者役の学生が絵の具と遊ぶ様子を観察し記録シートに言葉や手の動き、表現行為等を記録した。



絵の具で遊ぶ保育の様子①  
保育者役と幼児役になる。



絵の具で遊ぶ保育の様子②  
二人一組でお互いに絵の具でどのように遊ぶかを記録する。

3. 見出されたカテゴリー

以上の手続きを経て明らかになったカテゴリーを表2に示す。



## (1) 感性に関するカテゴリーについて

幼児は、絵の具と出会うと色が変わった瞬間に画面をじっと見たり、何かに気付いて不思議がったり、なぜなのかと考えたりするなどの反応を示した。特に顕著に反応がみられたのは、色の変化に対してであった。幼児が表情や言葉・行為などで表した絵の具の色の変化に対する反応から、感性のカテゴリー表を作成し、年齢ごとの出現頻度をみた。学生の場合も同様に、幼児役の学生がどのように反応するかを観察しながら記録シートに記入した。

表2 感性に関するカテゴリー

カテゴリー	内 容	幼児の例	学生の例
明度・濃度	絵の具の明るさ、濃い、薄いなどに気付く	「濃くなった」、「明るい色になった」など	「濃いところと薄いところがある」、「色が暗くなった」など
消失(消えた)	絵の具を混ぜたが、加えた絵の具が溶け込んでしまった様子について発言する	「消えた」、「なくなった」など	発言はない
手の色の変化	手を見て、手の色が変わったことに気付く	「真っ黒手ってになっちゃった」、「手ってが違う」など	「手が汚れる」、「この手どうしよう」、「汚い」、「やだー」「きもい」など
混 色	混色の結果できた色について、どのような色になったかを発言する	「みどりになった」、「おもしろいねずみいろになった」など	「緑になった」、「紫になった」、「オレンジ色」など
判 断	色の美しさや愛着を感じた気持ちなど判断したことを発言する	「きれい」、「かわいい」など	「いい感じになった」、「上手」、「きれい」、「かわいい」
言葉で表現できない色	色の変化に気付いたが、できた色について言葉で思うように言い表せない	「変な色になった」、「こんな色になった」など	「変な感じ」、「変な色」、「自分の心」、「えぐい色」など
予 測	次に入れる色がどう変化するか予想を立てたり予測したりする	「今度はどうなるかな」、「〇色入れたら何になるかな」など	発言はない
手の感覚	絵の具が手についたとき、思わず自分の手を見る	手のひらを画用紙から外して、目の前に持ってきて見る動作	「冷たい」、「この感触無理!」、「気持ち悪い」など

驚き・感動	色の変化に驚いたり、面白さを感じたりして、感動したりしたときの発言	感嘆詞「わー、きゃー」、「おー」「すっごーい」など	「わー」、「すごい」、「びっくりした」、「不思議!」、「魔法みたい」など
表情の変化	混色によって色が変わり、表情が変わった時やその時の発言する	急に笑顔になること、「ちがうになった」「かわったよ」など	「楽しい」、「やばい」、「おもしろーい」目の色が変わる。爆笑する。
動きの気付き	絵の具がにじんで動くことや、色が変わった瞬間に気付いて凝視したり、変化したりしたときにどのように変わったかを発言する	「ほらっ、みてみて」、「うごくよ」、「かわった」など、画用紙や手のひらをじっと見たり、気付いたことを思わず言ったりするなど	「にじんでいく」、「色が動いている」、のびていく、「どうしよう」など

#### 4. 結果及び考察

##### (1) 絵の具での遊びにおける幼児の感性の特性

絵の具遊びの実践では3歳児13名、4歳児11名、5歳児16名の計40名の協力児の姿から感性の特性を探った。以下年齢ごとの特性と思われる姿を記述する。

3歳児では、絵の具を動かしてみても思わず「ハッ」と手の色を見たり、画面と手の色と見比べたり、絵の具を混ぜて色が変わるたびに何度も手のひらを見るなど、【手の感覚】に関する動作が多く見られた。手に絵の具が付く感触や色の変化を直接肌で感じるとというような、手の感覚を確かめている。このことから、絵の具が自分の手の色を変える様子に気付いていることがわかる。

このように、絵の具そのものを手で感じたまま素朴に受け止めて、絵の具の性質に気付いていることがわかる。

4歳児になると、「オー」、「すっごーい（色がにじんでいく）」というような【驚き・感動】に関する発言が多く見られた。これは絵の具が動いてにじんだり混ざったりすることへの気付きと、そのことへの驚きを4歳児が持っていることを示している。それに加え、3歳児同様、【手の色の変化】や【消失】も多くみられた。ただし、「魔法の手だ。」「てぶくろみたい。」など見立てのエピソードが含まれ、「薄色だから消えていく。」「あれ?かくれたよ。」など、なぜ色が消えるかの理由を考えたり、今まで見えていた色の存在そのものが消失したのではないという、認知にもとづく変化の気付きがみられたりした。このことから、4歳児は色の変化に対して気付く様子がみられる。このように4歳児は新しい色ができることに興味や関心をもっている段階と思われる。

5歳児では、「赤入れたらどうなるかな。」「青したら（青を入れたら）きっと紫なるよ。」「黄色入れたらドキドキする。」など色の変化を【予測】する発言が4色使用時でも多くみられ

た。これは、4種類の色があることを認識していて、次に加える色によって色が変わることを想定し、どんな新しい色にしようかと能動的に働きかけている様子がうかがえる。

また、加える絵の具を混ぜる前と後の変化を確かめるように、手の中の絵の具をじっと見つめたり、手を動かしたりしながら途中で手のひらを思わず見たりするという【手の感覚】の出現傾向もみられる。このように、どんな新しい色にしようかと能動的に働きかける。このことから、5歳児は、新たな色をイメージして混色することに意欲をもつ段階と思われる。

## (2) 絵の具での遊びにおける学生の感性の特性

絵の具を使っての授業において、はじめに「いつもは筆を使うことが多いが、今日は絵の具に直接手で触って感触や色の変化に気付いてほしい。」ということをした。学生の中には事前に当日の授業内容や汚れてもよい服装で授業を受けることを伝えていたが、それでも「手が汚れる。」「服が汚れたらいやだな。」など、絵の具を使う活動に対して拒否的な発言をする様子もみられた。保育者として子どもがどんなことに気が付くのかを観察することで、保育者が子どもの何に気付いてどのように見守ったり支援したりしたらよいかを学ぶ機会とすることを説明し、実践した。

学生は、【明度・濃度】に関するカテゴリーの発言は少ないが「色の濃いところと薄いところがある。」「(色を混ぜていくと)だんだん暗くなってきた。」などといった言葉が聞かれた。【判断】のカテゴリーでは「かわいい。」「いい感じになった。」「上手。」「きれい。」と言う発言が多く聞かれたのも特徴的である。

【表情の変化】のカテゴリーは、一番多く出現したカテゴリーである。「楽しい。」「やばい。」「おもしろい。」と言った発言をしながら、絵の具の色が変わる瞬間に表情が変わる瞬間をとらえている。「目の色が変わる。」「爆笑する。」という記録も見られ、絵の具が変化することを幼児同様、体で感じ取っているように見受けられる。

【手の感覚】のカテゴリーは、約 20%近くの学生が反応しているが、「冷たい。」「この感触無理!」「気持ち悪い。」など、心地よく感じているのではなく、手の感触をマイナスのイメージとしてとらえていると思われる。

## (3) 幼児と学生とのカテゴリー出現数の比較とその考察

まず、比較をして驚いたのは幼児の協力児 40 名から感性に関するカテゴリーが 490 回も出現したのに対し、学生 103 名の出現数は 289 回であった。一人当たり換算すると、幼児では 12.25 回に対して学生一人当たりは 2.86 回で、幼児の方が 4 倍以上もつぶやいたり、表情に表したり様々な絵の具の変化に気が付く様子が見られる。学生の場合は、「汚い。」「絵の具を直接手で触るのはどうも気が進まない。」「服が汚れる。」といった気持ちが先行していたように思われる。また、幼児の場合は、その活動を VTR に収録し、何度も再生しながらつぶやきや表情を観察したが、学生の場合は実際の活動場面を見ながら保育者役の学生が記録をするというもので、見落としている場面もあったと思われ、一概に比較は出来ないと思われるが、絵の具に対して積極的な幼児に対し、学生は消極的な対峙の仕方が伺える。

さらに、幼児と学生を比較することから見た特徴的な点は、【表情の変化】の категорияにおいて、幼児の場合は 17.14%ともっとも出現率が多く、学生も 23.0%ともっとも多かった。絵の具にはその素材のもつ不思議な魅力や力があり、色に変化することに対して幼児も学生も敏感に反応していることが分かる。また、幼児は【驚き・感動】の categoria が次に多く 16.12%であることに對して、学生のほうは【手の感覚】の categoria が 19.51%と多い。前述したように、残念なことは「気持ち悪い。」や「この感触無理!」「ぐちゃぐちゃ。」といったマイナス的イメージの言葉が多いことである。

幼児は、手に絵の具が付く感触を直接肌で感じ取り、思わず自分の手を見たり、「冷たい。」「気持ちいい。」「ぬるぬるする。」などといった言葉が聞かれたりした。こういった場面が、幼児の絵の具に対する行動と学生と大きく違うと思われる。大場<sup>9)</sup>は「絵の具というのは、一番大事なのは、水いたずらとか、粘土っぽいような塗るいたずらみたいなものと、色水屋さんごっこみたいなものと、いろいろなものが感覚の中に働いていく。」と述べている。このようなことから、幼児は絵の具と出会うと、水いたずらをしたり、塗るいたずらをしたりするなどして、いたずらをする感覚、つまり絵の具と一体となって遊ぶ感覚で、絵の具に積極的に働きかけていると思われる。学生は幼児のように“いたずらする”という感覚になかなかないのではないかと思われる。

ここで着目したい点は、表3で見られるように、一番違いが見られた【消失】と【予測】の categoria である。【消失】では、幼児は絵の具そのものが画面に残っていても、色の変化を「キエタ」ととらえている点である。例えば、赤に青が入ると紫に変化するが幼児は「(赤)なくなっちゃった。」「(混ぜた色が)消えた。」「あれ、かくれたよ。」などの発言をした。学生はこれまでの学習や経験で混色すると色が違う色に変化することが分かっており、消えたのではなく「変化した。」ととらえているので、消失の categoria に関する言葉はないのは当然と思われる。

この「キエタ」ととらえる幼児の変化への気付きは、幼児ならではの気付きの言葉であると思われる。まさに感性を働かせて混色の不思議さを表したのではないだろうか。「カクレタ」と発言した幼児は、今まで見えていた色そのものが消失したのではないという認知に基づいていると思われる。今まで見えていた色が次に絵の具を加えると、その色が見えなくなる様子を「カクレタ」と言い表している。

また、【予測】では、幼児が、「赤色入れたらどうなるかな。」「黄色入れたらどうなるかな。ドキドキする。」「青色入れたらきっと紫になると思う。」などと、次に入れる色がどう変化するかを予測する発言が聞かれるのに対して、大学生の場合は全くみられなかった。幼児の方がドキドキワクワクして混色への期待感や意欲をもっていることがうかがえる。大学生のほうは、「○色+△色=□色」ということが、これまでの学習や経験で分かっているので、絵の具の混色の予測をしながら遊びを進めるといったことがないようである。

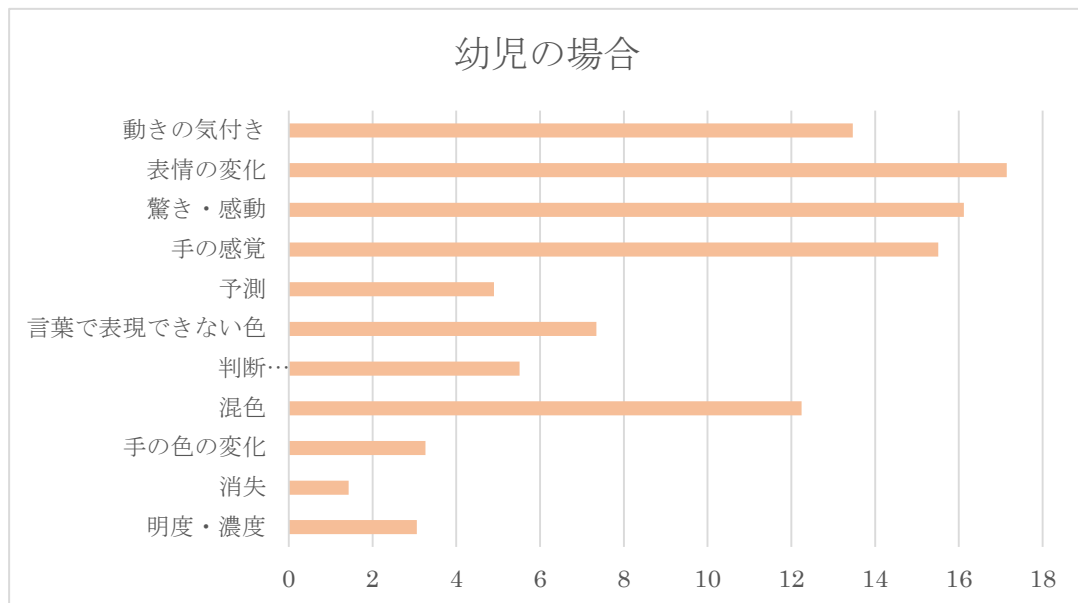
幼児にとって新たな色が生まれるということは、偶然のことである。幼児はその偶然を、目を輝かせながら楽しみ、色の変化や絵の具の動きをじっと見つめていた。このことが、さらに「もっとやってみよう。」という意欲につながっていったものと思われる。また、絵の具を混ぜるといったことが新たな色が自分で作るということであり、幼児にとっては驚きや面白い発見であり、心が動かされる体験であると思われる。

このように、幼児の気付きと学生の気付きとは大変異なることが分かった（表3、図2、図3）。前述した【消失】と【予測】の他に【(絵の具の)動から気付き】についても、顕著な違いが見られる。幼児の出現率が13.47%に対し、学生の出現率は3.52%である。幼児の方が絵の具はなぜ動くのか、不思議に感じたことや変化に気付いたことを多く発言している。それはなぜなのか。大人になると、様々な制約や常識、恥ずかしさが先行することなどから無邪気に遊ぶことが出来ないからではないだろうか。このことから、保育者を目指す学生たちに対しては、幼児期ならではの特徴的な気付き方を、幼児のその表情やつぶやきから幼児が今何に気付いているのかを受け止め理解することの大切さに気付く指導をしていく必要があると感じた。

表3 「感性」に関するカテゴリー出現数(率)の幼児と大学生との比較

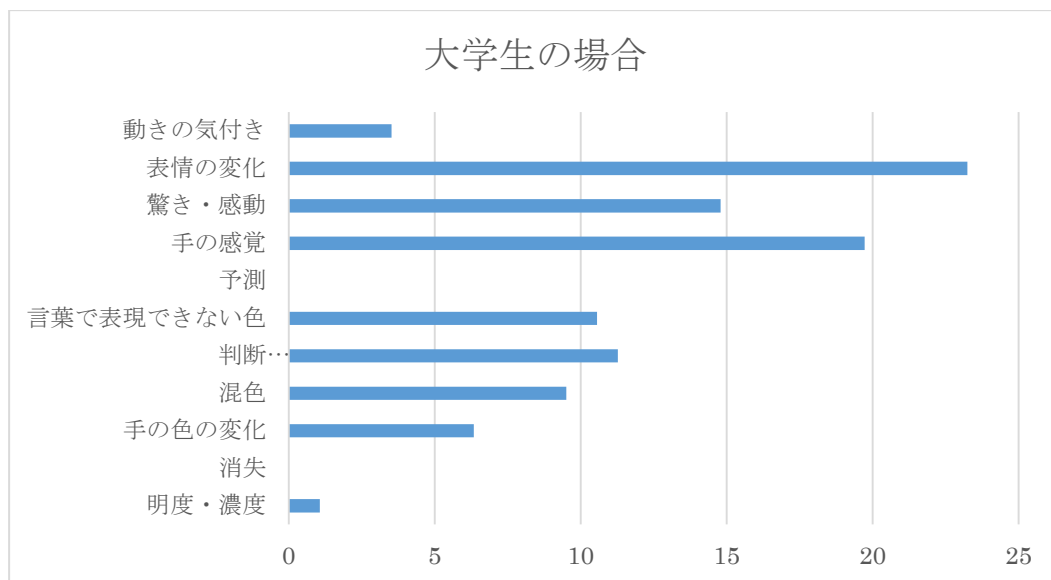
	カテゴリー	幼児の出現数 (N=40)	大学生の出現数 (N=103)
1	明度・濃度	15 (3.06)	3 (1.06)
2	消失	7 (1.43)	0
3	手の色の変化	16 (3.27)	18 (6.34)
4	混色	60 (12.24)	27 (9.51)
5	判断 きれい、かわいい	27 (5.51)	32 (11.27)
6	言葉で表現できない色	36 (7.35)	30 (10.56)
7	予測	24 (4.90)	0
8	手の感覚	76 (15.51)	56 (19.72)
9	驚き・感動	79 (16.12)	42 (14.79)
10	表情の変化	84 (17.14)	66 (23.24)
11	動きの気付き	66 (13.47)	10 (3.52)

注 ( )内は%



(注) 数字は%

図2 幼児のカテゴリ出現率



(注) 数字は%

図3 大学生のカテゴリ出現率

図4 3歳児から5歳児の幼児と学生の作品例



3歳児作品



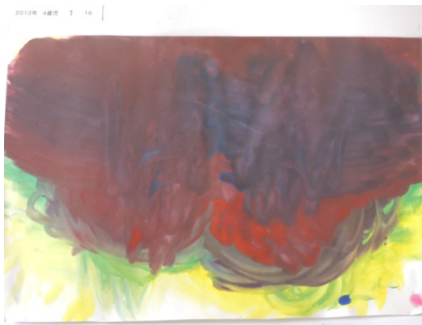
3歳児作品



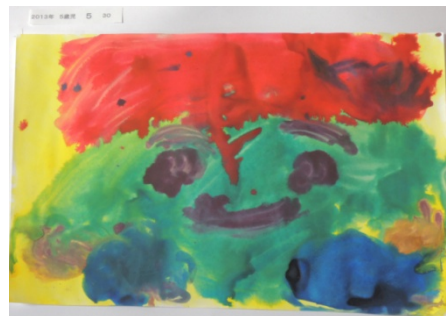
4歳児作品



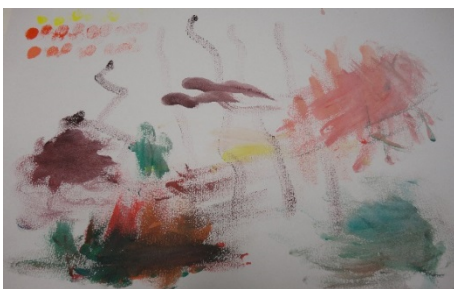
4歳児作品



5歳児作品



5歳児作品



学生の作品



学生の作品

## 5. まとめ

### (1) 幼児の心を動かす絵の具との出会い

無藤(2001)<sup>10)</sup>は著書『知的好奇心を育てる保育』の中で、幼児期にふさわしい知的な育ちとして次のように述べている。「子どもの知的な働きを刺激するものとしてそれ自体(素材)が不思議だという子どもの驚嘆の思いを引き出すということがあります。(中略)変化に子どもの目が向き、『不思議だな』と思います。そういったことは必ずしも子供が何かをしたいと思っ、そこに工夫を加えようとして生じるわけではありません。いわば先方(素材)が勝手に変わるのであり、その変化に子どもが気づき、驚くのです。そういった驚きにも知的な働きが関与しています。そもそも驚くとは、以前からの期待に反することが起こったことへの気づきによります。その驚きがさらなる探索に繋がっていけば確かに知的な働きを育てる経験となっていくでしょう。けれども、驚きと感動がなければ、先に進みたいという思いは生まれません。保育としては驚きを可能にする出会いと、さらにその探求を可能にする設定とが必要になります。(中略)『わー、すごい』と思わず声が出たり、『あれー、どうしてだろう』と疑問も出たりするかもしれません。(中略)疑問を持って、考えて、さらなる不思議を探し出すことです。」

(p.105-107)とあるように、気づきから驚きとなり感動につながるような素材の一つが「絵の具」であると思われる。このように驚嘆の思いを引き出し、幼児の心を動かす素材との出合わせ方が大切と思われる。変化に子どもの目が向き、知的好奇心が生まれ、心を動かして表現したいという意欲が育まれ学びにつながっていくと考える。

また、槇(2015)<sup>11)</sup>は、保育機関紙「美育文化ポケット」の中で、「色と触れ合うのにもっともふさわしいのは絵の具でしょう。色の変化に水の魅力も加わるので、すぐに歓声上がるような活動が始まります。何かを塗るためだけでなく、色の魅力と出会うための絵の具遊びを是非取り入れましょう。夢中になって繰り返し遊ぶことで、感じる、わかる、ことがたくさんあります。また、色には様々な表情があります。(中略)色のイメージは視覚や触覚、時には聴覚や嗅覚も伴って育んでいくものです。」(p.12)と述べている。

絵の具は水との出会いで様々な表現の仕方ができるので、幼児の感性を育むための遊びであることを学生に伝え、共に絵の具での遊びの教材研究や題材開発などが出来るのではないかとと思われる。

### (2) 幼児の心の動きに気付く保育者の援助について

幼稚園教育要領解説<sup>12)</sup>には、「幼児は、生活の中で様々なものから刺激を受け、敏感に反応し、諸感覚を働かせてそのものを素朴に受け止め、気付いて楽しんだり、その中にある面白さや不思議さなどを感じて楽しんだりする。」(p.160)と述べられている。保育者は、幼児のように身近な環境を敏感に受け止め、幼児が何に心を動かし気付いたか、幼児の「気づき」に「気付く」ということが大切と思われる。

ベルトネン(2012)<sup>13)</sup>は、「幼児に対する描画指導の課題—『大沢野幼稚園における壁面制作』の指導から—」において3歳児の様子を「幼児にとっては、壁についた手の跡も、自分の手に残る塗料(絵の具)の跡も、同じように不思議で楽しい状況であることが指導をしなが



ら分かった。」と述べている。また、「そのことを幼児との会話のきっかけにし、そこからどのような手型模様を壁に付けるかについて考え行動させることができた。」とあり、幼児が絵の具に触れてどんなことに楽しさを味わうかに気付くことが、指導の効果につながることを示していると思われる。

さらに保育者の大切な心がけとして「幼児が周囲の環境に対して何かに気付いたり感じたりして、その気持ちを表現しようとする姿を温かく見守り、共感し、心ゆくまで対象とかかわることを楽しめるようにすることが、豊かな感性を養う上で重要である。」とある。時には子どもは遊びに興味を示さなかったり、心ここにあらずで、粗雑な活動の仕方をしたりすることもある。しかし、あせらずにその子の気持ちの有様を探りながら我慢強く付き合うことも必要となってくる。その子の表情や行動の様子を観察しながら、心ゆくまで素材や遊びにかかわる姿を大切にしたいと思う。

また、幼児の気付きから心を動かす素材を見つけ、環境の構成に生かしながら幼児の造形活動に教材化できるよう努めることも大切である。

## 6. 今後の課題

### (1) 保育現場での絵の具との出合わせ方の工夫

今後は、長期的な見通しをもって、幼児が感じたことや考えたことを自分なりに表現できるような造形遊びの援助のあり方を考えるために、さらに同様の調査を行い、さらに検証する必要があると考える。幼児の場合の今回の遊び方は、幼稚園で二人または三人を一組にして行っていたが、このような絵の具での遊びは一斉的にはなかなかできにくいと思われる。一人の担任が実践する場合はサポートする先生が必要となってくる。保育現場における造形活動の指導に生かせるような環境の準備や支援の仕方も探っていきたいと思う。

実際の保育現場においては、造形活動を行う場合、一人または二人の保育者が学級の数十人の子どもたちと同時進行で活動を展開していくことが多い。その過程の中で幼児一人一人の瞬時の反応に保育者が気付き、指導に生かしていくことはなかなか困難である。本研究で感性の視点から幼児の気付きの特性をとらえることができ、学生の感性とのズレや違いを見出せることができた。今後、保育者が気付いたことを幼児の感性を育てる指導にどのように生かしていくかを深めることが大切と思われる。

現在、射水市の教育長であられる長井忍先生は、富山大学教育学窓会 会誌 123 号 (2015)<sup>14)</sup> の巻頭言『『楽しみ』と『愉しみ』』で、図工の授業を参観され、女の子に「これ、粘土？」と尋ねたところ「いちごの葉っぱ。」と答えたというエピソードに触れ、次のように述べている。「私と女の子とでは、同じものを見ていても、見ている世界が全く違っていた。忘れかけていた子どもの世界をのぞかせてもらったようで心が和んだ。そして、童の心をもって創造の世界に心を遊ばず楽しさ、目に目えないイメージの世界と目に見える形の世界を行き来しながら試行錯誤を繰り返すそのずれを埋めていく創造の楽しさ、そんな楽しさを日常の中で久しく失っていたことに気付かされた。」このことから、子どもの感性を受け止め、子どもの姿や言葉、し

ぐさなどから気付いて、子どもの世界を学ぶことが保育者にとってとても大切なことであると考える。このような場面は日常の保育の中でたくさんあることなので、大切に学生に伝えていきたいと思う。

絵の具に出会った時、幼児の目の輝きや表情など反応の仕方はさまざまで、同じ反応の仕方は一つとしてなかった。保育者の思いでイメージをもたせて何かを描かせるよりも、絵の具という素材そのものに出会うことが幼児を生き生きとさせることが分かった。本研究では、幼児の年齢別の傾向も探ったが、一人一人に目を向けた個性的な反応の仕方にも着目する必要があると思われ、今後の課題としたい。

学生の絵の具での遊びの体験レポートの中に、「手で絵の具を触ってみて、筆を使うのと違い、“手と画用紙の近さ”がとても楽しく感じた。」、「混色を楽しむの前に、絵の具の感触を楽しむことが出来た。保育だからこそ出来る遊びだと思った。」、「友達が『〇〇ちゃんの色すごいね。きれい』などと言っているのを聞いて、新たな色を発見して自分もやってみたくらいという思いになった。子どもの絵の具って楽しい、こんなこともできる、やってみたい、という気持ちをしっかり受け止めることが大切だと思いました。」等、子どもの心もちになって、素直に感じたことを表していることがうかがえる感想があった。子どもと絵の具で遊ぶことを想定して、感覚的なことにも気付いている様子も窺える。このように保育者としての自分の感性に気付くことを大切にしていけることが、保育者としての感性の育成につながるのではないと思われる。

## (2) 描かない子、描けない子、描きたくない子への支援

保育現場では絵を描かない子、描けない子、描きたくない子が多くなっていると聞く。

学生たちが保育者となって保育現場に出ると、このようなことに必ず対応を迫られ、悩むのではないと思われる。花篤(1987)<sup>15)</sup>は「0～4歳児の造形」の著書の中の「助けを求める幼児たち」に絵を描かない子・描けない子について次のように述べている。「指導者も子どもも、絵を描くというと、形を描かねばならない、上手に描かねばならないという思い込みがあって、素直に絵が描けなくなっているというつまづきがある。特に今の幼児は0歳からテレビや絵本で育っていて、いろいろの知的発達の刺激に囲まれ、それだけでなく頭でっかちになっているので『〇〇を描きましょう』となると、頭で覚えている形に手がついていかなくて、それに家庭生活での依頼心があるものだから『わたし、描けない』『描きたくない』という言葉につながってしまう」と述べている。このことは28年も前に述べておられることであるが、現在においても、未だに描かない子・描けない子についての指導に現場の保育者の悩みは尽きない。花篤は「色や形で遊ぶという気楽な気持ちをもつ」ことや「造形的な遊び教材による基礎感覚の育成」の大切さを述べている。これからも「造形的な遊び教材による基礎感覚の育成」は大切な課題であると思われる。本研究では「絵の具」という素材について研究を行ったが、絵の具は幼児の基礎感覚を育成するとよい素材の一つであり、描けない子・描かない子た

ちにとって少しでも描く喜びや楽しさが味わえるようさらに研究を深めていきたい。

### (3) おわりに

近年、子どもたちを取り巻く環境の変化が多く、身近なテレビはもとよりパソコンや携帯電話などがどんどん進化し、私たちの身の回りには、たくさん色と形があふれている。0歳児はもとより胎児のときから様々なメディアに囲まれて、その中で暮らさなければならなくなっている。幼児であっても、家庭に帰るとゲーム機で遊んでいることを耳にするのが日常的となっている。これからの子どもたちは確かにそういった様々な機器やメディアに慣れ、情報を操作し処理する能力が必要とされていく。しかし、こうした情報化社会の時代こそ、幼児期に思いっきり体を動かし、色や形や質感を味わう素朴な「本物の体験」を重視した様々な造形遊びが大切になってくるのではないだろうか。

保育教諭養成課程研究会<sup>注2)</sup>では、領域「表現」をめぐる養成校の現状と課題を取り上げ、「幼児期に育成すべき資質・能力に対応して保育者に求められるものは何か、そしてこれを養成校の授業はどのように捉え具現化しているのか」について研究が進められている。あらためて「図画工作」や「保育内容（造形表現）」の授業の大切さを感じる。

子どもたちの感性を育む保育者となるための授業は、どのようにしたらよいだろうか。

槇(2008)は「保育をひらく表現」(2008)の中で「子どもたちの豊かな表現を育む人は、心豊かな「受け手」として子どもたちのそばにいなければなりません。(中略)私たちがまず学ばなければならないのは、表現の技法ではなく、表現を引き出し、尊重し、共感し、その楽しさを共有できる心と身体のあり方です。」と述べている。

幸い、筆者が現役時代に収集してきた年齢別の個性豊かな子どもの作品の写真データがあることや、現在T市3園で実践している親子造形活動の記録があり授業で紹介している。なるべく生の実際の乳幼児の姿を授業で伝えながら、幼児の発想や感性の表れの素晴らしさが、実感できるように工夫をしていきたいと考えている。

### 倫理的配慮

本論文は、筆者が未発表の論文を加筆修正し、新たに保育者養成の立場にたって学生を対象にした実践データを基に比較し考察をしたものである。

この記録の閲覧については、筆者から協力園の園長と担任教諭に対して調査の趣旨を説明し、研究資料としてビデオによる記録を用いることを説明し協力を依頼した。また得られたデータは個人情報の厳重な管理と適切な処理を行い、研究以外の目的には用いないという説明を添えた。また、調査結果は協力園に報告書を送付し開示済みである。

## 引用文献

- 1) 文部科学省、教育課程研究センターの特定の課題に関する調査—小学校図画工作・中学校美術—、(2009)、国立教育政策研究所、P.14
- 2) 神長美津子、保育教諭養成に向けて—幼稚園教員養成の立場から—、保育教諭養成課程研究第1号、(2015)、保育教諭養成課程研究会編集委員(編)、 P.80
- 3) Lowenfeld、V、美術による人間形成(竹内清・堀ノ内敏・武井勝雄訳)、(1995)、黎明書房、P.139-140、(Lowenfeld、V。(1947) Creative and mental growth 3<sup>rd</sup> edition. New York: The Macmillan Company.)
- 4) 佐藤学(監)、驚くべき学びの世界、(2011) ワタリウム美術館(編)
- 5) 文部科学省、小学校学習指導要領解説 図画工作編、(2008) 日本文教出版、P.6-7
- 6) 広辞苑第六版、岩波書店、(2014) P.636
- 7) 「前掲」(5) P.160
- 8) 槇英子、保育をひらく造形表現、(2008)、萌文書林、P.20
- 9) 大場牧夫、表現原論、—幼児の「あrawし」と領域「表現」—萌文書林、P.85
- 10) 無藤隆、知的好奇心を育てる保育、学びの三つのモード論、(2001) フレーベル館、P.105-107
- 11) 槇英子、美育文化ポケットNo.2、保育の中の造形カリキュラム、(2015) 美育文化協会、P.12
- 12) 「前掲」(5) P.160
- 13) ベルトネン純子、幼児の対する描画指導の課題—『大沢野幼稚園における壁面制作』の指導から—。(2012) 富山大学芸術文化学部紀要第7巻、P.118-121
- 14) 長井忍、富山大学教育学窓会会誌 開始編集委員会(2015) 123号、P.2
- 15) 花篤實、幼児画の本、みずえのぐによる技法・実践・理論指導、(1983) 株式会社サクラクレパス出版部、P.31

(注1) 1998年6月、水橋中部幼稚園(現在 水橋幼稚園) 4・5歳児園庭での遊びの記録

(注2) 2014年3月に設立された一般社団法人で、保育教諭養成のために研究を行っている。